

学会トピックス

全欧消化器病週間 (United European Gastroenterology Week: UEGW) 2011 参加印象記

福 永 健

兵庫医科大学内科学 (下部消化管)

去る 2011 年 10 月 22~26 日, 第 19 回ヨーロッパ消化器病週間 (19th United European Gastroenterology Week; UEGW) が北欧, スウェーデンの首都ストックホルムで開催された。初冬の北欧ということで, かなり寒いものと覚悟して赴いたが期間中雪は降らなかった。

欧州最大の消化器系学会である UEGW は町の中心部から少し外れた巨大なコンベンションセンターで盛大に開催された。学会発表によると参加者は約 1 万 2 千人, 参加者は EU を始め世界各国から参集していたが, 実は日本からの参加者は全体で 9 位とアジアはもとより, 非ユーロ圏でも最多であった。今回日本消化器病週間 (JDDW) と一部日程がかぶってしまったことを考えると, 日本人研究者の参加数の多さに驚かされた。日本の研究者はやはり内視鏡分野での参加が多く, 本学会において若手に贈られる賞では最も権威のある National Scholar award に本年度, 内視鏡治療 (ESD) の研究で演題を発表された Sendai City Medical Center の Maeda 先生が選出された。また, “The State of the Art in modern endoscopy: Japanese/European joint endoscopy symposium” と題された日欧内視鏡学会のジョイントシンポジウムが企画されるなど内視鏡分野での日本人の活発な活動がみられ「アフェレシスでもいつか…」と思いを強くしたものである。

本年度の UEGW は各日に一つずつ, 計 3 つのシンポジウム枠と 10 月 24 日と 35 日に各々一つずつ, 計 2 つの特別枠 “Today's science, Tomorrow Medicine” を中心に多数の Oral および Poster セッションから構成されていた。IBD の分野も例年の如く多くの演題が報告されていた。今回, 小生の所属施設からは口演

1 演題と示説 2 演題を発表させていただいた。私は口演セッション “New ulcerative colitis therapies” において, 演題 “CHINESE HERBAL MEDICINE “XILEI SAN” AS REMISSION INDUCTION AND MAINTENANCE THERAPY FOR PATIENTS WITH REFRACTORY ULCERATIVE PROCTITIS: A PROSPECTIVE RANDOMISED DOUBLE BLIND PLACEBO CONTROLLED TRIAL” と題し, 我々が独自に開発した坐薬製剤の難治性直腸炎型潰瘍性大腸炎患者に対する有効性を無作為割り付け二重盲検試験で評価し報告した。3 スクリーンを擁する大きな会場があてがわれ, 大いに緊張した。示説セッションには, 三重大学消化器内科から国内留学で来られていた Kikuyama 医師が当院における Cytomegalovirus (CMV) 感染症合併 UC の経過と予後をまとめた演題を提出し, 本年度の Poster Award を獲得した。示説もう一演題はアフェレシスに関する演題 “A new treatment strategy for Crohn's Disease patients with poor response or intolerance to anti-TNF- α ” で, 難治性クローン病患者に対する顆粒球・単球吸着療法の有用性を発表した (写真 1)。

他にアフェレシス関連の演題では, Toho University, Sakura Medical Centre の Katsuno 先生や Kitasato University East Hospital の Yokoyama 先生 (写真 2A), Osakahu Saiseikai Nakatsu Hospital の Fukuchi 先生 (写真 2B) が本邦で開発された白血球除去療法 (アフェレシス) の従来治療に抵抗する IBD 患者への有用性を様々な観点から評価し報告し, 参加者から多くの興味と質問を得ていた。米国では Sands らの Negative result (Sands BE, et al. Gastroenterology 2008) 以来, アフェレシスに対する風当

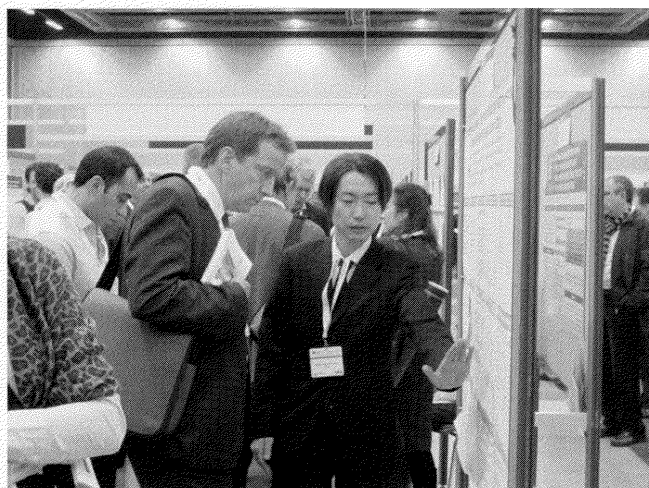


写真1 示説発表で奮闘する当科上小鶴孝二先生

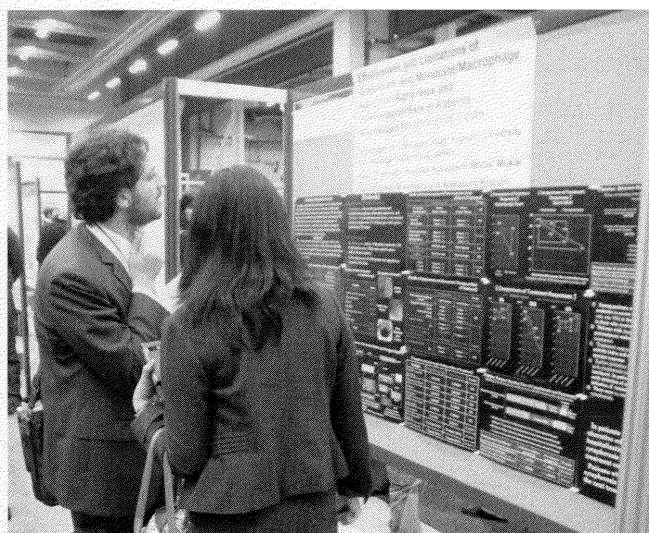


写真2A 示説発表される北里大学東病院の横山 薫先生

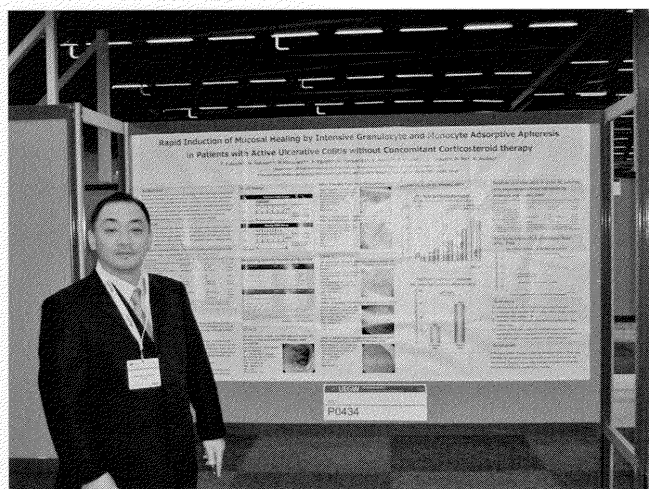


写真2B 示説発表された済生会中津病院の福知 工先生



写真3 1901年以来、ノーベル賞受賞者とその家族が滞在するホテルとして有名な、グランドホテルストックホルム。130年以上の歴史がある最高級ホテルである（残念ながら、私の逗留ホテルは別）。

たりは依然強いが、欧州では Karolinska 大学の Löfberg 先生をはじめ、難治性 IBD に対する追加選択肢としてアフェレシスを積極的に活用している医師・施設も多く、UEGW において質問内容はその作用機序や維持治療への発展の可能性、biologics との併用の是非など、この本邦発の治療法を肯定的に認識している様子が肌で感じられた。

ストックホルム市街は一地区ごとが小さい島にあり、それらを無数の橋で繋いだようになっていて、「北欧のヴェネチア」という別名通りの水辺に映える美しい都市であった（写真3）。滞在中のストックホルム天気にも恵まれ、学会の合間には初めて訪れる初冬の北欧を満喫できた。

繰り返しになるが、UEGW には欧州気質とともれる「新しく出てきたものを肯定的に受け入れてくれる」懐の深い印象がある。本邦の学会シーズンと重なるため、なかなか参加が難しいかもしれないが是非一度この雰囲気を感じていただきたいと思う。

次回、UEGW は2012年10月20～24日、オランダ、アムステルダムで開催される。